

ウド大量増殖のための新しい株分け法

木村 稔・服部 実*・青田 聡

(福島県農業試験場・*福島県農業経営指導課)

New Multiplication Method of Udo salad plant

(*Aralia cordata* Thunb.)

Minoru KIMURA, Minoru HATTORI* and Satoshi AOTA

(Fukushima Prefecture Agricultural Experiment Station・*Agricultural Management
Division of Fukushima Prefectural Government Office)

1 はじめに

福島県内におけるウドの栽培は、株分けした種株を春期に植え付け養成し、秋冬期に掘り上げて温床内に伏込み軟化栽培し、冬春期に出荷している。

ウドの増殖法としては、前年に養成した根株を用い、大きい芽が付くように1株100g程度に分割して植え付ける株分け法が一般的である。

しかし、この方法では、1根株から得られる種株は4～5個体程度である。このため、増殖に用いる根株を大量に確保しておく必要があり、この増殖率の低さが、産地の拡大や品種更新がなかなか進まない要因の一つともされている。

ウドの増殖方法としては、このほかにも萌芽後の若茎を茎挿したり、種子を利用する方法もあるが、株の養成に2年以上要したり、形質がばらつく等の問題もある。

このため、効率的で安定的に増殖させる方法として、根株に着生する芽を有効に利用する育苗法を開発したので報告する。

2 試験方法

(1) 株分け法及び育苗に供する芽の調整法

根株に着生する径20mm以上の大きい芽を主芽、それ以下の小さい芽を伏芽とした。(図1)

根株より、主芽部及び伏芽部をそれぞれ3cm程度の深さに切り込み、さらに育苗用土に埋設する部分をくさび形に整形した。

これらをポット育苗して移植する栽培における増殖効率及び根株収量等を、慣行の株分け栽培と比較検討した。

(2) 耕種概要

1) 供試系統 「愛知紫」系

2) 育苗開始 1999年3月11日

3) 育苗方法

a. 黒土にもみがらくん炭を10%添加した用土を用い、9cm径のポリポットに埋設した。

b. 温床温度は20℃に設定した。

c. 処理後1ヶ月間は50%遮光で管理した。

4) 本圃

a. 移植

主芽区・伏芽区 1999年5月14日

慣行区 1999年4月16日

慣行区は、根株を分割し、主芽を1芽付け、100gに調整したものを種株として用い、移植した。

b. 栽植密度 畦間150cm 株間60cm (1.1株/㎡)

c. 施肥量(kg/a) N:1.5 P₂O₅:4.3 K₂O:1.5

d. 掘り取り 1999年12月8日

3 試験結果及び考察

(1) 根株より得られる芽の状況

一つの根株から得られる芽の数は、主芽で6.7個、伏芽で5.5個、合計12.2個であった。また、芽の重量は、伏芽では小さく、主芽の半分以下であった(表1)。

表1 1株から得られた芽の数量及び重量

部位	芽の数/株(個)	重量/芽(g)
主芽	6.7	27.2
伏芽	5.5	12.0

(2) 育苗の状況

整形した芽をポット育苗した結果、80%以上の高い割合で成苗化された。また、主芽区に比べて、伏芽区の成苗率

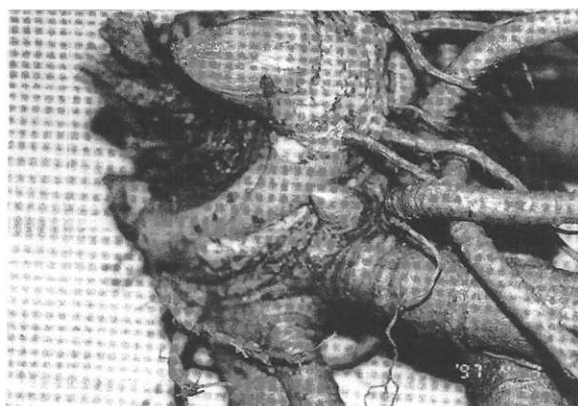


図1 ウドの芽の拡大図
(上部が主芽、その下部にあるのが伏芽)

表2 移植時の苗の性状

区	育苗 開始 (月日)	成苗率 (%)	移植期 (月日)	移植時の生育	
				草丈 (cm)	葉数 (枚)
主芽	3.11	96	5.14	40	3.9
伏芽	"	83	"	34	3.1
慣行*1	—	—	4.16	—	—

注. *1 慣行区の萌芽期は5月14日

表3 移植後の生育及び掘り取り時の根株の生育

区	抽だい期の生育 草丈(cm)*2	根株重量 (g)*3	株当たり主芽数 (個)*3
主芽	102	1,640	5.1
伏芽	93	1,760	4.5
慣行	131	1,700	5.7

注. *2 抽だい期：9月13日調査

*3 掘り取り期：12月8日調査



図2 移植期の苗(伏芽)

及び苗の生育がやや劣ったが、これは芽の大きさや貯蔵養分等の影響が考えられた。しかし、一つの根株から併せて10本以上の苗が確保された(表2)。

なお、伏芽から養成した移植適期の苗を図2に示した。

(3) 株養成の状況

本圃における生育調査は、抽だい期の9月13日に実施した。草丈は、主芽区、伏芽区いずれも慣行区を下回っていた。

しかし、12月8日に根株を掘り上げて調査したところ、一つの根株に着生する主芽数は、主芽区及び伏芽区で慣行区をやや下回ったものの、根株重量は、慣行区とほぼ同等であったことから、伏込みにも十分利用が可能であると判断された(表3)。

4 ま と め

ウドの根株に着生する主芽と伏芽を切り取り、ポット育苗することで、1つの根株から10本以上の苗が確保され、従来の株分け法の2倍の増殖が可能となった。

また、この苗を本圃に移植し養成したところ、伏込みにも十分利用可能な根株が得られた。

しかし、この方法では育苗に2ヶ月程度要すること、ポットや育苗用土等、新たな資材や労力を必要とすることから、本技術の利用については、従来の株分け法の補完や産地拡大のための緊急的な増殖等が想定される。